About Us

上廣死生学・応用倫理講座
特任教授
会田 薫子

上廣死生学・応用倫理講座は東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター内におかれた寄付講座です。公益財団法人上廣倫理財団の出捐団体としています。当講座は 2007 年度に開設され、臨床死生学および臨床倫理やケア倫理、生命倫理等の応用倫理を担当領域として、研究と教育および実践活動を進めています。

2023 年度はこれまでの 3 期 15 年間の実績を踏まえ、第 4 期の 2 年目に入りました。今年度も一層の研究展開と社会貢献を進めてまいる所存です。

死生学は単に「死について」の学ではなく、死を生に伴い、また生が伴うものとして、「死生」を一体として考え、人間が死生をどう理解し対処してきたかについて、人文知を背景に広く考えようとします。その意味で東京大学の死生学研究は 2002 年以来、死生学を “thanatology（死の学問）” というよりも “death and life studies” として捉え、人文社会系を中心とする学際的な研究プロジェクトを進めてまいりました。

当講座の活動は死生学の中核領域である臨床死生学の研究と実践活動を軸にしております。臨床死生学は臨床現場で実践の知としてはたらく学問です。医療機関や介護施設、在宅医療・介護の場などの医療とケアの現場において、死生をめぐる諸問題に関し、患者 / 利用者本人と家族等および医療とケアに携わる人々のニーズに応え、死生学が得た知見を医療とケアに活かすことができるようなかたちにして提供しようとします。その際、判断の土台となる医学的な新知見も適宜取り入れます。

このように文理融合の知を創出しつつ、上廣死生学・応用倫理講座は臨床死生学と臨床倫理を軸とする研究と実践活動に注力しています。臨床倫理は臨床現場において、一人ひとりの治療やケアや療養場所などの選択に際し、本人を人として尊重する意思決定の実現を目指します。その実践的研究の成果は医療・ケアの臨床現場に浸透しつつあり、高齢者医療・ケアの領域などで実績をあげてきました。

当講座は死生学・応用倫理センターの中心メンバーの協力を得て、バランスのよい研究・教育・実践活動の展開を目指しています。

Activities 01 臨床倫理プロジェクト

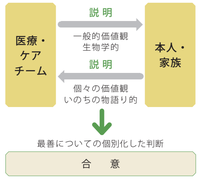
本講座のおもな研究・実践活動の 1 つは『臨床倫理プロジェクト』です。「臨床倫理」は、医療・介護の現場で、医療・ケア従事者たちが、患者 / 利用者本人や家族と応対しながら医療・ケアを進めて行く際に起きる諸問題について「どうするのがよいか」を、本人を中心に考える営みです。本プロジェクトは次の 3 点をおもに目指しています。

●日本社会の文化に合った臨床倫理の考え方と検討の方法を見出し、それを普遍的に理解できる言葉で表現すること。これまでの研究の成果である、「カンファレンス用ワークシート」などの臨床倫理検討シートを用いた事例検討の演習を、全国各地で行っている臨床倫理セミナーに組み込み、現場における実装を目指すこと

●現場の医療・ケア従事者との協働で実践的研究を進め、医療・ケアの質の向上、今後の医療・ケアの望ましいあり方の実現に寄与すること

●医療・ケアの現場で死生の問題をどう考えるべきかという臨床死生学の課題を臨床倫理的に検討すること。それによって新しい時代の看取り文化の創成に貢献すること

意思決定プロセスの「情報共有―合意」モデル



◆意思決定プロセスの「情報共有―合意」モデル

医療・ケアを提供する側が有する情報と医療・ケアを受ける本人・家族側が有する本人の生活と人生に関する情報を互いに提供して共有することをベースにしつつ、コミュニケーションを通して合意形成を目指します。これは清水哲郎前特任教授を中心に、国内の医療・ケア従事者と 30 年にわたる協働によって開発された、国内独自開発の共同意思決定 (SDM：shared decision-making) のモデルです。

◆生命の二重の見方

私たちのいのちには、生物学的対象になる身体的生命という相と、自分のいのちの物語りを創りつつ一歩一歩進む人生という相があります。身体が支えてくれなければ、人生は展開できません。ですから、人生を豊かに展開するために、生命を整える必要があるのです。

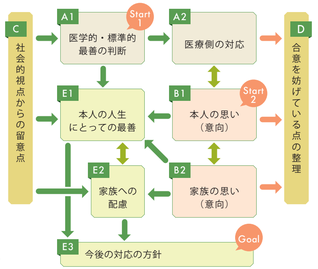
臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成研修の開催

「臨床倫理プロジェクト」の活動として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成講座を開催し、基本的な考え方のレクチャーと事例検討の演習を行ってきました。2020 ～ 2022 年度はコロナ禍のなか対面研修を制限する一方、e-learning コンテンツを公開し、リモート研修も実施しました。2023 年度はリモート開催の拡大を目指すとともに、可能なところから対面研修を再開します。右記は事例検討の演習で使用している臨床倫理検討シート（カンファレンス用ワークシート）です。

検討シートを用いて分析する臨床倫理の方法は、『臨床倫理の考え方と実践 ― 医療・ケアチームのための事例検討法』（東京大学出版会、2022）に記述しました。同書については本リーフレットの裏面もご参照ください。

臨床倫理検討シートは、以下のサイトからダウンロードできます。

http://clinicalethics.ne.jp/cleth-prj/worksheet/



Activities 02 意思決定支援ツールの開発と死生に関する思想的・倫理的研究

長命は人類が希求してきたところであり、医学・医療が目指してきた生存期間の延長は寿命革命につながりました。一方、さまざまな加齢変性を抱えながら最期へ向かう過程において、医療のためにかえって本人の苦痛が増す場面もみられるようになりました。多くの人にとって人生は長くなりましたが、老衰の進んだ超高齢者に負担となる医療行為が行われることも多くなりました。私たちはこのジレンマにどのように対応すべきでしょうか。

当講座ではこのテーマに関わる意思決定支援のため、さまざまな取り組みを行ってきました。その主だった成果として、まず、日本老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン ― 人工的水分・栄養補給の導入を中心として」(2012) への参画が挙げられます。

次いで、この課題を本人と家族の視点から捉え、本人と家族が医療・ケア従事者の助言を得ながら最善の選択に至ることを支援するため、『高齢者ケアと人工栄養を考える ― 本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2013) を出版しました。その成果を踏まえ、慢性腎臓病の専門医療者との協働で、『高齢者ケアと人工透析を考える ― 本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2015) を出版しました。いずれも本人・家族らと医療・ケア従事者間の共同意思決定 (shared decision-making:SDM) を支援するためのツールです。また、科学技術振興機構社会技術研究開発センター (RISTEX) のプロジェクトとして、高齢者が最期まで自分らしく生きることを支援するための『心積もりノート』(2015) を開発し、frailty 研究の知見を取り入れ改訂版 (2018) を発行しました。

さらに、日本老年医学会の「ACP 推進に関する提言」(2019) および「新型コロナウイルス感染症流行期において高齢者が最善の医療およびケアを受けるための提言」(2020) においても、当講座の研究成果が活かされています。また、AMED 研究課題 2 件 (柏原直樹班、三浦久幸班、2022) においても意思決定支援ツールの制作に携わらせて頂きました。

さらに本講座では、現場の臨床実践を下支えし豊かに捉え直すような多角的な思想的・倫理的研究を行い、その成果を広く社会に還元しています。その一つが本講座の協力教員も執筆に加わった『医療・介護のための死生学入門』(2017)。

2017 年度から本講座に加わった早川特任准教授は、人間存在の傷つきやすさや依存性に着目する「ケアの倫理」の観点から、臨床倫理における人間理解や意思決定支援の理解を理論的・思想的に奥行きのあるものにすることを試みています。また田村特任助教は死やケアについて透徹した思索を展開したハイデガーの研究をもとにして、人間の死生をめぐる哲学的・倫理的問題を根本的に考察しています。さらに坂井特任研究員は臨床現場における本人側と医療・ケア従事者間のコミュニケーションについて社会学の方法論を用いて実証研究を行い、野瀬特任研究員は、物とは区別されるものとしてのわれわれの精神や生命について論じたベルクソンの哲学の研究を通して、自由と生命をめぐる哲学的・倫理学的問題を考察しています。

BOOKS

Activities 03 各種活動

臨床倫理プロジェクトの研究成果を社会に還元する活動に力を入れています。社会還元は同時に、研究成果が臨床現場において実際に有効かどうかを確認し、さらに改善しようとする実践的研究でもあります。

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科における教育活動

死生学・応用倫理センターは部局横断型『死生学・応用倫理教育プログラム』を提供しています。これは全学に開かれたものであり、一定の単位を取得すると卒業時に修了証が交付されます。本講座教員は「死生学概論」、「応用倫理概論」を含め、本プログラムが提供する科目を数多く担当しています。

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

臨床現場で働く方たちが死生についてどのように理解し、どのように医療とケアに活かしていくかを研鑽していただくための活動です。毎年、夏季セミナーとレポート書き方セミナー、およびエンドオブライフ・ケアをテーマとする春季シンポジウムなどを行っています。

さらに、本コースの単位として認定する研究会・講演会があります。受講者は所定の単位を取得し、修了レポートを提出すると、審査を経て修了が認定されます。2022 年度末の春季シンポジウムは「ACP の考え方と実践 ― 本人を人として尊重する意思決定支援」をテーマとしてオンライン開催し、1200 名を超える方々に参加申し込みをいただきました。

臨床死生学・倫理学研究会

水曜日夜間に年 10 回程度開催しています。死生の問題に関わる分野の方に発表をしていただき、参加者がディスカッションする研究会です。第一線の臨床家や研究者の講演の他、死生に関わる市民の活動、若手研究者の意欲的な研究など、さまざまな場面からテーマを選んでいます。2022 年度はオンラインで 10 回開催し、延べ 4,424 名の方々にご参加いただきました。2023 年度もオンライン開催を継続します。

2022 年度のテーマと講演者 (敬称略)

4 月 20 日	◆「集学的痛みセンターの誕生までの道のりとその意義（多職種集学的痛み診療）」 加藤 実（春日部市立医療センター ペインクリニック 科 主任部長、日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野 臨床教授）
5 月 11 日	◆「在宅医療における意思決定支援 ― MSW の役割」 阿部菜子（在宅ケアクリニック川岸町 医療ソーシャルワーカー、居宅介護支援事業所かわぎし町 主任介護支援専門員）
5 月 25 日	◆「ハイデガーの「死」の概念と他者理解の問題 ― ケアの現象学に向けて」 田村未希（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座 特任助教）
6 月 15 日	◆「慢性腎臓病・透析医療における SDM(shared decision-making) の現況と課題」 小松 康宏（群馬大学大学院医学系研究科 医療の質・安全学講座 教授）
6 月 29 日	◆「身体抑制のないケアを目指して」 出村 淳子（金沢大学附属病院 看護部 副看護部長（臨床倫理担当））
10 月 12 日	◆「COVID-19 パンデミックと公衆衛生倫理」 大北 全俊（東北大学大学院医学系研究科・医療倫理学分野 准教授）
11 月 2 日	◆「おたるワンチーム（ICT）を活用した終末期医療の取り組み」 髙村 一郎（髙村内科医院 院長）
11 月 16 日	◆「CKM（保存腎臓療法）の現状と今後の課題」 岡田 浩一（埼玉医科大学 腎臓内科 教授）
12 月 7 日	◆「“ 弱さ ” の倫理学」 宮坂 道夫（新潟大学大学院 保健学研究科 教授）
12 月 21 日	◆「“ 老年的超越 ” の現在」 増井 幸恵（東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 研究員）

Until Now

左から、野瀬彰子、早川正祐、会田薫子、田村未希、坂井愛理

2002 ～ 2006 年度……東京大学大学院人文社会系研究科　21 世紀 COE「死生学の構築」（リーダー 島薗進教授）
2007 ～ 2011 年度……同 グローバル COE「死生学の展開と組織化」
2007 年度……上廣死生学講座発足　特任教授 清水哲郎　特任講師 山崎浩司（総括監督者 島薗進教授）
（東京大学の死生学研究を強化すべく、公益財団法人上廣倫理財団の寄付金により設置）
2011 年度……死生学・応用倫理センター発足（センター長 池澤優教授）
2012 年度……上廣死生学・応用倫理講座（上廣死生学講座の改組、拡充）　特任教授 清水哲郎
特任准教授 会田薫子　（総括監督者 榊原哲也教授）
（山崎浩司特任講師は信州大学に准教授として転出）
2013 年度……死生学・応用倫理センターに堀江宗正准教授着任。上廣講座に特任研究員 3 名着任
（早川正祐特任研究員は同年度末に三重県立看護大学に准教授として転出、
圓増文特任研究員は 2014 年度に東北大学に助教として転出、
宮村悠介特任研究員は 2014 年度に愛知教育大学に助教として転出）
2015 年度……上廣講座に特任研究員 2 名（山本栄美子、田村未希）着任
2016 年度……清水哲郎特任教授が岩手保健医療大学に学長として転出
2017 年度……上廣講座第 3 期開始　特任教授 会田薫子　特任准教授 早川正祐
2018 年度……死生学・応用倫理センターに小松美彦教授着任
2020 年度……上廣講座に特任研究員 1 名（坂井愛理）着任
2021 年度……死生学・応用倫理センターに鈴木晃仁教授着任
2022 年度……上廣講座第 4 期開始　特任教授 会田薫子　特任准教授 早川正祐
2023 年度……死生学・応用倫理センター長堀江宗正教授
上廣講座に特任研究員 1 名（野瀬彰子）着任

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics,
Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1　法文 2 号館 3 階 25 号室
Rm. 25. Bldg. Hobun No.2, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan　Tel & Fax: 03-5841-2656
e-mail: dalsjp@l.u-tokyo.ac.jp　https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls

People

■ 会田 薫子（あいた かおるこ）特任教授

略　　歴　東京大学大学院医学系研究科健康科学専攻博士課程修了（保健学博士）。ハーバード大学メディカル・スクール医療倫理プログラム フェロー、上廣死生学・応用倫理講座特任准教授を経て現職。
専　　門　臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学
主 要 著 書　『臨床倫理の考え方と実践 ― 医療・ケアチームのための事例検討法』（東京大学出版会、共編著）、『長寿時代の医療・ケア ― エンド・オブ・ライフの論理と倫理』（ちくま新書）、『医療・介護のための死生学入門』（東京大学出版会、共編著）『延命医療と臨床現場：人工呼吸器と胃ろうの医療倫理学』（東京大学出版会）、『シリーズ生命倫理学第 3 巻　脳死・臓器移植』（丸善出版、共著）等

■ 早川 正祐（はやかわ せいすけ）特任准教授

略　　歴　東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻（専門分野：哲学）にて博士号取得（文学博士）。上智大学哲学研究科特別研究員、東京大学上廣死生学・応用倫理講座特任研究員、三重県立看護大学看護学部准教授を経て現職
専　　門　哲学・倫理学、臨床死生学
主 要 著 書（共著）　*Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended* (ed., K. Lai, Palgrave Macmillan), *Moral and Intellectual Virtues in Western and Chinese Philosophy: The Turn toward Virtue* (eds, C. Mi, M. Slote, & E. Sosa, Routledge)

■ 田村 未希（たむら みき）特任助教

専　　門　哲学
個々人それぞれの歴史的・社会的・文化的背景が異なる中で、個人の解釈視点による制約を認めつつ、それでもなお相手を理解しようとするにはどうすれば良いのか、という問題に、ハイデガーの哲学を手がかりとして取り組んでいます。

■ 坂井 愛理（さかい えり）特任研究員

専　　門　社会学
触れること・触れられることを通して、治療やケアの社会関係がどのように組織されているのかを、老いや麻痺のある身体に対するマッサージ場面を対象に分析しています。

■ 野瀬 彰子（のせ あきこ）特任研究員

専　　門　哲学
人格的な側面とともに自然的・社会的な側面をもつ人間の多層的な理解と他者との対話・聞わり合いを生かした意思決定支援がいかにして可能かを考える手がかりを、ベルクソンの自由論の発展史的研究および後期の生命論の研究から取り出すことを試みています。

協力教員

■ 池澤 優（いけざわ まさる）教授（死生学・応用倫理センター（兼務）　上廣死生学・応用倫理講座総括監督者

専　　門　中国宗教史、死生学、生命倫理学、環境倫理学
上廣講座の『医療・介護従事者のための死生学』基礎コースのセミナーで講師をするほか、東京大学の部局横断型『死生学・応用倫理教育プログラム』の立案と実施を担当し、またその分野における国際的研究交流を企画しています。

■ 堀江 宗正（ほりえ のりちか）教授（死生学応用倫理専門分野）　死生学・応用倫理センター長（兼務）

専　　門　死生学、宗教学
現代のスピリチュアリティ、死生観の研究を専門としています。海外の死生学者とパンデミックに対する人々の反応について共同研究をおこなっています。

■ 鈴木 晃仁（すずき あきひと）教授（死生学応用倫理専門分野）　死生学・応用倫理センター（兼務）

専　　門　医学史
精神医療の歴史と感染症の歴史が専門になります。医師や医療関係者の視点と、疾病の視点、患者の視点の三者を組み合わせることを目標にしています。

死生学・応用倫理センター

■ 陳 健成（ちん けんせい）特任研究員

専　　門　近世中国儒教史
儒典の解釈（経学）を通して、当時新しい儒学である朱子学がイデオロギーとされた明代に、皇帝の祖先祭祀の儀礼はどう変容したのかを明らかにしようとしています。

■ 矢口 直英（やぐち なおひで）特任研究員

専　　門　医学史、思想史
イスラーム世界における医学や科学思想の歴史が専門です。宗教の影響力が強い社会を生きる人々が発展させていった人体観や世界観を研究しています。

■ 孫 婧（そん せい）

専　　門　医学史、食の歴史、日本史
日本及び東アジアにおける栄養学と食の歴史が専門です。栄養と食の視角から医療・政治・経済の連動を考察する学際的な研究を目指しています。

『臨床倫理の考え方と実践ー医療・ケアチームのための事例検討法』

（東京大学出版会，2022）

《臨床倫理プロジェクト》が研究開発してきた臨床倫理の理論と実践の具体的な方法論について詳述しています。

同プロジェクトがスタートしたのは 1980 年代後半。米国でも臨床倫理が興ってきた時代に、その動きと並行しつつ、米国からの翻訳学習ではなく、日本の社会的文化的特徴を踏まえた独自の臨床倫理の考え方が、研究者と現場の医療・ケア従事者の長年にわたる協働によって形成されてきました。

本書第 II 部の「実践編」では、総勢 16 名の医師・看護師・メディカルソーシャルワーカーが、意思決定支援に難渋しがちなさまざまな事例について、実際に行われるカンファレンスを念頭に対応のありかたついて執筆しています。

AMED 長寿科学研究の成果

AMED 長寿科研「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始 / 見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」（研究代表者：川崎医科大学 柏原直樹氏）では、現場の臨床家との協働で、「医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」を開発しました。

AMED 長寿科研「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」（研究代表者：国立長寿医療研究センター　三浦久幸氏）では、「アドバンス・ケア・プランニング支援ガイド」の開発に携わりました。

高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール

アドバンス・ケア・プランニング支援ガイド

2023

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター

上廣死生学・応用倫理講座

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics,
Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo